

## 審査の結果の要旨

氏名 中村 杏奈

抑うつ状態はうつ病者だけでなく健常者にも連続的に見られる状態であり、その支援の質の向上は臨床心理学において重要な課題である。常に変動する抑うつ気分を少ない機会から評価し、適切な支援方法を選択するためには、①一回一回の評価の正確さを高めること、②少ない評価機会から日常の気分の変動を予測することが求められる。本論文では、対人交流の基本要素である他者表情への反応に着目し、①意識的に操作できない脳機能や認知的側面から抑うつ状態を理解し、より正確な評価方法を提案すること、②日常の中での変動を測定することで、常に変動する感情の動的な側面を理解し、一時点からの予測力を高めることを目指す。論文は、問題意識と研究構成を示す第1章、表情に対する脳機能的な反応を検討する第2章、認知的な反応を検討する第3章、より日常に近い表情への接触を想定して情動反応を検討する第4章、総合的な考察と今後の課題を示す第5章から構成される。

第1章では、抑うつにおける表情認知のネガティブバイアスに着目して先行研究のレビューを行い、脳機能・認知・情動の各領域における課題と本稿の構成・目的を示した。

第2章では、うつ病患者と健常者（N = 23）にfMRI実験を実施し、他者表情の主観的な認知体験に対応する脳機能を検討した。その結果、患者群は主観的に悲しい表情だと感じている時の扁桃体の反応が健常者よりも強いこと、行動レベルにおける主観的なネガティブバイアスと扁桃体における主観的な悲しみ表情への反応が強い相関を示すことを明らかにした。加えて、患者群と健常群を含む連続的な検討において、主観的な悲しみ表情に対する扁桃体の反応と抑うつ症状の間に相関を見出した。

第3章では、大学生58名に認知心理実験を実施し、縦断的に抑うつ評価を行なった結果、診断が無い抑うつ状態においても悲しみ表情に対する感受性の高さが見られること、一時点のネガティブバイアスが3ヶ月後の抑うつ状態を予測することを明らかにした。

第4章では、健常成人58名を対象として、実験室内で表情に対する情動反応を測定すると共に、経験サンプリング法を用いて日常の中での社会的刺激に対する情動反応を計測した。その結果、実験における表情への情動反応は日常での社会的刺激への情動反応を予測することを明らかにした。一方で、抑うつ状態において表情への接触はネガティブ情動を低減させること、ネガティブ情動において社会的な刺激の回避をする人は抑うつ気分の予後が悪いことが示された。脳機能や認知におけるネガティブバイアスから、抑うつでは情動反応もネガティブになることが予想されたが、逆に社会的刺激が抑うつ気分にもポジティブな影響を与えることが示唆された。これは外部刺激への接触によって内省から開放される効果があったものと考察された。第5章では得られた知見の意義を総括した。

本論文は、他者表情への反応を脳機能、認知、情動反応の側面から多面的に検討し、抑うつ評価の質の向上に貢献する知見を得た点、抑うつをスペクトラムとして捉えることで特に健常者の中の抑うつ状態の理解に焦点を当てた点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。